HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Negative Idealism of Percy Bysshe Shelley : His Self-Revisionism toward "The Triumph of Life" [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	白石, 治恵
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13713号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76334
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Harue_Shiraishi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：白石 治恵

主査　教授　瀬名波　栄潤
審査委員　副査　教授　大　西　郁夫
副査　教授　野　村　益寛

学位論文題名
NEGATIVE IDEALISM OF PERCY BYSSHE SHELLEY:
HIS SELF-REVISIONISM TOWARD “THE TRIUMPH OF LIFE”
（パーシー・ビッシュ・シェリーの否定的理想主義：
「生の凱旋」に至る自己修正）

・当該領域における本論文の研究成果

本論文は、英国ロマン派時代の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー(1792-1822)の創作における動因を否定的理想主義（negative idealism）と特徴づけ、詩人の初期からの詩と散文創作を検証し、否定と創造を繰り返しつつ自己修正を重ね到達した彼の理想主義が最後の作品 “The Triumph of Life”（以下 TL）に結実したことを論じている。

シェリーの理想主義はプラトン主義を基とし、「神は人語では表し得ない」とする否定神学的認識を有する否定的な理想主義にある。彼は究極の理想である詩的霊感をいかに原型に近く人語で表し得るかを、生涯模索し挑戦し続け、先行作品とは主題、構成、表現等において全く異なる絶筆の TL で、否定が表す様々な手法を用いて、語り得ないものを語る言語表現の限界と可能性を示すに至ったと、本研究は主張する。詩人の最後の作品を、文字通り集大成と位置づけ、「否定的理想主義」という概念で系統立てて論証した本格的な研究と言える。

本論文は 2 部 10 章から成り、それぞれの部は TL 以前 5 章と TL の分析 5 章に分けて構成されている。第 1 部では「必然論」「菜食主義」「美意識」「宗教と神話」「英雄的主人公像」の 5 つの観点から、TL に至るまでの否定と創造の繰り返しによる理想追及を分析している。第 2 部では、批評史を踏まえた上で、「認識論」「必然論の再解釈と知の象徴」「女性像」「エンディングの否定」の 4 点について先行作品と比較しつつ、TL で試みられている理想の新たな表現方法を解析している。両

部に通底するのは、プラトン主義を基に否定神学的要素を加えた、否定的理想主義という新規的な視座である。

具体的には、第 1 部第 1 章で、*Queen Mab* での絶対的信頼から、*Alastor* では必然の懲罰を受け入れることにより必然を乗り越えた理想的詩人像を描いている点が興味深い。第 2 章では、何事も突き詰めて考える詩人の思考傾向により極論化された、肉食嫌悪の根源である、肉食＝人肉食の連想という新たな発見を紹介している。第 3 章では、恐怖を駆り立てる美へと美意識が修正されたことを指摘し、メドゥーサの絵を言語化したシェリーの詩を分析し、「絵画→シェリー→詩→読者」という、インタラクティヴな言語表現を指摘している。第 4 章では、キリスト教の非科学性と専横に対する初期の激しい嫌悪から、聖書をギリシャ神話のように物語として客観視することにより、キリストを受容可能なものへと自己修正したことがロマン派詩人としての特異性を証明している。第 5 章では、シェリーの描く英雄的主人公像を、他者のために自己を犠牲にする改革者と、他者を顧みずただ自己の理想を追求し孤立してゆく芸術家の二つのタイプに分類し、その変遷を明確にしたことが新しい。

第 2 部第 1 章では、TL の批評史を明確に分析し、第 2 章で TL が散文“On Life”の完全反映であることを検証し、彼の認識論を分析すると同時に、群衆に対する観点の変化を指摘したことは重要である。第 3 章においては、ロマン派詩人にとってはアンビヴァレントな存在であるナポレオン観の修正を、歴史主義と詩人の使命に紐づけて説明していることは一定の評価に値する。第 4 章では、詩人の「否定、知の否定、自然の否定、および名の否定」という属性を持つ新たな理想的女性像を見出したことはシェリー批評に新たなフェミニスト的地平を拓いたと言える。最終章になる第 5 章では、終わりは「意図的な否定」であり、シェリーの「未必の故意」とし、詩人最後の作品を思想的および方法論的な集大成として肯定的に捉え、本論の主旨を確認しており、より説得力のある論文へと帰結させている。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、プラトン主義を基に否定神学的要素を加えた、否定的理想主義を導入して証明している点に新規性があり貴重な研究と言える。先行研究では、シェリーを Idealist、あるいは Sceptic、もしくは両方とみなし、論じられてきたが、否定神学的視点を応用した研究はこれまでになく、新たな視座をシェリー研究に提唱するものである。

ただし、審査の過程において、「否定的理想主義」について、系統立てた説明が必要との意見があった。具体的には、三点指摘された。すなわち、（１）新規性が

あり説得力もある一方で、（矛盾する要望ではあるが）それを支える先行研究や外部資料のさらなる充実が望まれること、（２）シェリー自身による意図的な否定という解釈もまた論理的にはしっかりしているものの、詩人自身の伝記情報・詩論の論拠に補うべき部分が若干見られる点、一般的にそうなのであるが、伝記的文学研究の難しさを覚えたこと、最後に（３）プラトン等の古典哲学への分析・考察が十分ではないこと、である。しかしながら、論文中で使用された文献は第一次資料と第二次資料を合わせて 175 点あり、巻末の注釈付書誌では TL 再評価の原点となったハロルド・ブルームの 1959 年の著作から 2019 年までの先行研究 109 点を丁寧にまとめている。現在のシェリーの TL 研究としては、最新の情報までをも網羅した学術的価値が非常に高い論文と言って間違いない。したがって、本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）にふさわしいものと判断した。